

現在を生きるかつての「日本人」(2) —母語を奪われた人— その2

佐藤貴仁 (亜細亜大学非常勤講師)
(元・交流協会台北事務所日本語専門家)

4. 「言葉がないみたい」

終戦後は、社会の変化に合わせて、教育の言語も日本語から北京語に切り替えられることになった。疎開先から帰還したのと同時に、中学に入学した陳さんだったが、その学校生活は、これまでとは一変した。なぜなら、北京語という新たな言語の習得をしながら、教科科目を勉強しなければならなかったことに加え、その内容も必然的に、小学校で学んできたものとは、まったく別のものになったからである。一例を挙げると、「地理、歴史とかあれ、みんな中国語の[名称だから]、全然その基礎がないです。中国の歴史とか地理なんか、全然、分からないし。小学校の時に、中国のことなんか分かるはずもない」と語ったことから分かるように、これまでは〈日本人〉として日本語で、日本の教育を受けていたが、終戦を境に、中国にルーツを持つ台湾人として北京語で、中国式の学校教育を受けるようになったという大きな転換を経験している。

しかし、それだけではない。さらに、生活言語である台湾語も、覚えなければならなくなった。国語家庭であったため、家の中でも日本語で「ほとんど日本人の生活」をしていたことや、学外では台湾語も併用していた国語家庭ではない台湾人の同級生よりも、訛がなく〈日本人〉らしい日本語を話すことを、ある種誇りのように感じていたそれまでの生活からは一転、大きな言語的ハンディを背負うことになってしまったのである。

*：じゃあ、とても困ったんじゃないですか。

陳：困りましたね、うん。もう中学校だから英語もやらなければならないし、// *：うん//それに台湾語もやらなければならない。

*：うんうんうん。

陳：3つの言葉を一緒に習ったから、大変でした。

*：でもその時でも、家庭の中では日本語だったんですよね？

陳：もう、そろそろ台湾語、使い出してた。

*：本当？ご両親も？

陳：いや、母が、あー、台湾語使えって言うんです//

*：うん//私たちに。日本語使うなど。

*：うん。

陳：もう時代が変わったから。

*：うん。でも、お母さんも日本語に非常に親しみがあるでしょ。

陳：そうそうそう。その代わり、彼女は小さい時、台湾語使ったことあるから。

学校では日本語から北京語に切り替わったのはもちろん、これまで、家族間における意思の疎通も日本語で行っていたにも拘らず、家庭の中でさえ徐々に台湾語に切り替わっていったことが、上述のやり取りから判る。その背景として、政府による社会からの日本語排斥が徹底して行われたことが挙げられるが、その過程において、陳さん以外の家族は、それぞれ台湾語に慣れ親しむ要素を持っていたのである。例えば、両親は日本教育を受けたとはいえ、元々台湾語は「分かっているけど、使わなかった」だけであり、幼少時の生活においては台湾語を使用していたことに加え、「下の弟や妹なんかは、家を出るとみんな台湾語と接触するでしょ。だから仕方ない、段々と変わりますよ。家でも台湾語使うようになって」と、まだ幼い兄弟の言語の吸収の早さを、陳さんが指摘していることから窺える。

また、中学1年生時に、この言語転換が行われ

たことによって、戦後の社会においては自分が「不利な立場に立たされた」と表現し、仮にこうした転換がなく、〈日本人〉のままであったら、「恐らくもっと偉くなったかな」と思うとも語っている。なぜかという、「日本語も途中で終わってしまった。日本語での教育も途中で終わってしまった。後から台湾語も覚えて、北京語も覚えた。それに英語」も覚えなければならなかったと語り、結局、どの言語も中途半端になってしまったからであると説明している。特に、教育言語であった日本語に関しては、「実際、習っていたのは13歳までだから、そこで止まっている」という事実から、「だから、子どもの言葉しか言えない。大人言葉はね、本で見るぐらいでね、使ったことないですよ。だから、大人言葉は言えないんです」と話している。

陳：中学の2、3年まで行っている人は、また違うんです。段階が違うんです。

*：その差は大きいかもしれないですね。

陳：私は1年と言っても、ほとんど勉強してない。あの[1945年5月31日の]空襲以来だから。

*：ええ、そうですね。

陳：2、3年勉強したから。[戦前に(5年制)中学を]卒業した人もおるしね、ここ[=玉蘭荘]でも。彼らの日本語はずっと我々よりまし。上です。

*：その3年間はやっぱり、

陳：大分違いますね。

陳さんによれば、この中学時代の2、3年間でも、日本教育を受けたことがある人は、受けなかった人に比べ、その日本語の能力に大きな隔たりが存在するそう。なぜなら、その間に学習する語彙や言い回しは、「大人言葉」に限りなく近いものだからである。だが、戦前、中学で日本教育を受けた年代にとっては、北京語による教育は一切

受けなかった人が大半であり、そんな彼らは逆に、戦前、戦後に股がって、両言語の教育を受けた陳さんのような人を羨ましがるといふ。しかし、そんな陳さんは、自身の言語能力については、懐疑的な発言に終始している。

陳：彼らから見たら、我々の方が得だって言う。なぜかという、中国語もできれば、日本語もできるっていう。その代わり、我々から見たら彼らの方が、日本語が正確に言えるんですよ。我々は言えることは言えるけど、正確でない。中国語もあまり正確でもない。だから、どっちが得か分からないですよ。

*：その…

陳：基本のあれがない。

*：核となる言語がない？

陳：そうそうそう。

*：それは今でも自覚されることがあるんですか。

陳：ありますよ。

*：どういう時ですか。書いたりする時ですか。

陳：いやー、書く時もあれば、スピーチする時、特に人前に立たされて話す時、違いますね。

*：緊張しちゃったり？

陳：ええ、緊張すると、忘れてしまう。しかも、混同してしまう、日本語使ったり、中国語使ったり、混乱。そして考えないといけない。すぐに出て来ない。果たして頭の中で、日本語で考えているのか、台湾語で考えているのか、分からない。どっちで考えているのか分からない。本当なら、何語で考えているか分かるはずだよ。

*：そうですね。

陳：私は分からないです。自分が何語で考えているのか分からない。

このやり取りは1回目のインタビューにおけるものである。最後に、「自分が何語で考えているのか分からない」と述べているが、このことは2回

目のインタビューでも、まったく同じ台詞で、繰り返し語られている。しかし、この一連のインタビューはすべて日本語で行われており、インタビュアーである私には、陳さんがしっかりと日本語で思考し、日本語で答えているように見受けられた。その真意を探るべく、誰とも話をしていない時には何語で考えているのかという質問を投げかけてみた。

*：例えば、台湾語で誰かと話した後で、もう一回振り返った時の頭の中の言語ってというのは、何語なんですかね。台湾語で話した場合は、台湾語で振り返ったり？

陳：そうそうそう。

*：日本語で話した場合は日本語で振り返ったりするんですか。

陳：そして話してない時、自分で思ってる時、果たして何語で思っているのか分からない。

*：ああ、そうなんですか。

陳：言葉がないみたいだね。

*：えー、どんな感覚なんだろう。

「言葉がないみたい」というのは、どんな感覚なのかと訊いてみると、「両方とも使うから、どの言葉で考えるか、決まってない」感覚だと言い、いわば自分の中に一つの核となる言語がないことが「不利」で、それが「一つの人にとっては、有利だ」と説明したのだが、その直後に、自分の中に共存するそれぞれの言語をどのように捉えているか、垣間見える発言をしている。

陳：恐らくやっぱり日本語の方が、何か、心に合っているとかな、ピンとくるとか、ああいう点があります。

台湾語はあんまり。あんまり馴染んでない。

*：まあ、後から覚えた言語ですからね。そうなんだ。じゃ、そういう…

陳：しかもね、中国語も入ってきてるから、3種類になるんですよ。だからこんがらがっちゃう。何語で考えているか分からない。

以上のやり取りからは、3言語が混同することで、結局、「自分が何語で考えているか分からない」状態になると発言しているものの、その中では、台湾語より、じっくりくるという意味合いで、日本語を捉えていることが分かる。このことから、どの言語も自分の核となる言語ではなく、その状態は「言葉がないみたい」な感覚であると話す一方、見方によっては日本語を〈自分の言語〉として捉えていることも考えられるだろう。だとすれば、なぜ「言葉がないみたい」だと語ったのだろうか。

これまでの発言から考察すると、一つには、自分の年齢層よりも上の日本教育を受けた台湾人は、自分と比較して「日本語一本だから、彼らの日本語は比較的正確」だという認識がある一方、自分の日本語は「こどもの言葉」であり、それほど正確でもないとする劣等意識や、13歳で「日本語での教育も途中で終わってしまった」という虚無感からくる自信のなさがあることも想像できる。しかし、同時に疑問も湧きおこる。それは、陳さんの中には本当に自分の核となる「言葉がないみたい」な感じがしているのだろうか、という疑念である。なぜなら、これまでのやり取りにおける受け答えを通し、私は、彼の中に確実に核となる言語＝日本語が、存在しているように思えたからである。

5. 誰が母語を規定するのか

2回目のインタビューも1回目と同様に、陳さんは「自分が何語で考えているか分からない」と語っている。しかしその一方で、戦後30年余が経過した1970年代に、職場の研修旅行で、生まれて初めて日本を訪れた際に、長らく触れることも

なく、日常的に使用してこなかった日本語が、自分の言葉として自然と出てきたというエピソードを披露している。

陳：あの時は、日本の歌をはじめ聴いて、感動しましたよ。

*：あ、そうですか。日本語だから？

陳：飛行場で、はじめに日本の歌「さくら」を聴いたの、嬉しかったです。

*：あ、そうですか。

陳：はい。

*：どんな感じがしましたか。

陳：自分の祖国に帰って来たような感じ。

*：えー！

陳：はい。

*：そうなんだ。

陳：うん。

*：ふーん。

陳：感じがね、昔の感じに戻ったような、

*：面白いですね。

陳：本当に昔の人間に戻ったような気が// *：初めて日本に行ったのに？//そうそう。何でも珍しいけど、嬉しい。

*：へーっ。

陳：はい。日本の食べ物食べたり、日本人の方とお話して。

*：うん。

陳：あれが一番嬉しかったですね。

*：すぐに、日本語が出てくる？

陳：そうそう、出てくる。ええ。

*：自然に？

陳：そう。自然に。

仮に、「何語で考えているか分からない」とすれば、では、その人の基盤となる言語は何か？という疑問が生まれるは当然だろう。しかし、日常的に日本語を使用しなくなって30年余も経過した

時点で、自然に耳に入り、口をついて出てくる言語があるとすれば、その言語は、その人にとっての「母語」とであると定義することができるのではないだろうか。Skutnabb-Kangas and Robert (1989) は、母語を以下の4つに定義している。

(1) 起源 = 最初に習得された言語

(2) 能力 = 最も熟知している言語

(3) 機能 = 最もよく使用している言語

(4) アイデンティフィケーション = a 自分が母語話者であると認められた言語

b 他者に母語であると規定された言語

上記のとおり、母語には複数の定義が示されていることはすなわち、その概念も曖昧であることを指摘していると同時に、母語の捉え方に再考の余地があるとも言えるだろう。しかし、ここではあえて上記の定義に従い、陳さんの例から日本語を母語と仮定し、その位置づけを考えてみることにする。

陳さんにとって、「(1) 最初に習得された言語」が日本語であることは、13歳までの生育環境に鑑みれば、自明の事実であると言える。また、「(2) 最も熟知している言語」という定義に関しては、研修旅行における陳さんの日本語による旅先のやり取りが、熟知感を伴う記憶の蘇りであるとすれば、納得できるだろう。実際に、旅先で話した日本人に対し、「会話した時なんか、『あなた私どこの人間だと思いますか』って聞くと、『九州ですか』って言われる。九州からですか』って」言われたというエピソードを例に出し、長らく日常的に接していなかったにも拘らず、「それぐらい日本語、まだ覚えていたんで」と話している。また同様に、長期間、耳にしていなかった日本語を「聞くのは全然問題な」かったと語っていることから、日本語に熟知していなければ、このように馴染んでいることもなかったと思われる。

さらに、現在においては「(3) 最もよく使用している言語」は日本語ではないが、13歳までは、

その生活ぶりから、最も頻繁に使用していた言語であったことは自明である。仮に、戦後の社会転換がなければ、「恐らくもっと偉くなったかな」と思い、「不利な立場に立たされ」ることもなかったと語ったことから考えると、陳さんにとって、日本語は取り上げられてしまったものであり、日本語での教育も途中で強制的に終了させられてしまったものだといえよう。そう捉えると、自分の意志が及ばないところで行われた、社会における日本語排斥がなければ、陳さんにとって日本語は、「最も頻繁に使用している言語」という立場を守り続けたことは明白だろう。

*：だから、もしね//陳：はい//後から勉強した言語
だったら

陳：うん。

*：もう何十年も使わなかったらね

陳：あ、忘れる。

*：きっと忘れてしまうと思うんです。

陳：そうそうそう。

*：でも

陳：自分の母語だから覚えてる。母語。

*：うん。

陳：すなわち、わたくしの母語は日本語です。

*：うん。だと思えますよ。

陳：はい。

*：うん。

陳：だからよく覚えてます。

上述は、長期に渡り日常的に日本語に触れていなかった陳さんが、ブランクがありながらも、違和感なく日本語でやり取りできたことに関して話したものである。仮に、あとから学習した言語であれば、遙か以前に忘れていたのではないかと私が話すと、ずっと日本語を忘れていなかったことに対する気づきから、陳さんは「すなわち、わたくしの母語は日本語です」と、日本語が自分の母言

語であることを認める語りをしている。これは、上記に提示した母語の定義である「(4) a 自分が母語であると規定した言語」に当て嵌まる。では、対になっている「(4) b 他者に母語話者であると認められた言語」に関してはどうだろうか。

戦後の台湾社会では、日本語は徹底的に排除され、段階的に施行された日本語禁止令により、消し去られる運命を辿り、代わって〈北京語〉という戦後における台湾人にとっての新たな〈母語〉が、急速に普及したという歴史がある。しかしそれは、強権的な措置を伴うものであったため、これまで日本語を日常的に使用していた陳さんのような台湾人にとっては、半ば強制的に〈母語〉にさせられたともいえるべきものであった。

こうして、戦後社会における台湾人は、他者に規定された言語を硬直的に〈母語〉として受け入れるしかなかった。この事実から、自分が認める〈母語〉と他者が要請する〈母語〉には乖離が生じることになったのである。すなわち、〈母語〉をどう規定するかは個人の問題であるにも拘らず、社会が強制的に〈母語〉の変更を迫ったことで、陳さん自らが日本語を〈母語〉だと規定しても、社会においてはそれが一切認められなかったことからくる、絶望感にも似た感情があったことは想像に難くない。よって、日本語という自分の母語があるのにも拘らず、それを他者から頭ごなしに否定され、使用されることが許されず、代わりにあてがわれた北京語、あるいは台湾語によって思考してみるものの、それは自分の言語ではないため、上手く考えることができない。このことこそが、「言葉がないみたい」だという状態だとすると、自分の言語である〈母語〉は自分で決めるものであり、他者に強制されるものではないにも拘らず、誰かに無理矢理決められてしまったことに対する違和感が、先の発言に繋がったと捉えることができるのではないだろうか。だが、この社会で生きていくためには、たとえ違和感があったとしても、

他者による半ば強制的な要請に、自分が合わせるしかなかったとも思えるのである。そう考えると、自分の言語を取り上げられてしまった陳さんの戦後からの人生は、我々が想像する以上に過酷で、そして、虚しさがつきまとうものであったのかもしれない。

さて、冒頭に戻ろう。私が最後に一つ、陳さんにしっかりと訊きたかったことは、「晩年になって深く関わるようになった玉蘭荘という場所に、多少無理をしてでも、なぜ未だに通いつけているのか」ということだ。このことを訊いてはみたものの、結局、回答をはぐらかされてしまった。なぜなら、本人にはっきり尋ねても、今では活動に携わるスタッフとしての「責任があるから」通っている、というようなことしか答えてくれなかったからである。しかし、よくよく考えてみると、この答えを探し出すのは、陳さんの話に耳を傾けたこの私なのかもしれない。なぜなら、歴史をかくぐって来た先人の話を聴いたということは、それを受け止め、共有して考えたその答えをきちんと提示しなければ、語らせたことの責任を果たすことにはならないからである。

かつて自分が〈日本人〉であったこと、自分は日本語を〈母語〉に持つ台湾人であるということ、表立って社会に示すことは難しい時代を生きてきた。ところが、時代は変わり、現在ではそれを表明することも憚られなくなった一方で、その歴史に理解を示し、受け止めて、共有してくれる誰かは、身近にはもうほとんどいない。しかし、そうした境遇に置かれた人は、現在もこの世界でしっかりとその人生を送っている。そう考える

と、彼らのありのままを肯定し、そして受け入れ、共に過ごす場が、玉蘭荘という場所なのかもしれないと思うのである。それは、陳さんと同様に通所している同じ歴史を辿った同世代の人々同士が認め合い、癒し合うことで作り上げている、快復と希望の場でもあるともいえるだろう。そして、誰かに自分の言葉を取り上げられるということが、社会に生きる一人の人間の尊厳を奪い、どれだけ傷つくことなのかということ、彼らの声から拾い、広く社会に訴えることが、残された我々に課された使命であると考えとするならば、今後もそうした人たちの話に、私は耳を傾けていきたいと思う。

【記述方法】

本文中における文献や文字化資料からの引用は「 」で表し、強調したい言葉や表現は〈 〉で示した。また、文字化資料における*はインタビューである筆者を表し、//はインタビューとインタビューの発話の重複部分を、[]は筆者による補足説明であることを示している。

【参考文献】

- 蔡茂豊 (1989) 『台湾における日本語教育の史的研究:一八九五年~一九四五年』 東呉大學日本文化研究所
- Skutnabb-Kangas and Robert (1989) "Mother Tongue' the Theoretical and Sociopolitical Construction of a Concept": In Ammon, U (ed) . Status and function of languages and language varieties. Berlin, pp.450-477.